

塙塚城跡

1987・3

中村市教育委員会

高知県中村市

塩塚城跡

県道川登有岡線、主要県道宇和島中村線
新設工事に伴う発掘調査報告書

1987・3

中村市教育委員会



結 岩 直 風 景（南から）



結西側斜面部調査風景（南から）



青

磁



青

磁

序

塩塚城跡（里ノ城）の埋蔵文化財発掘調査は川登地区に新設される県道川登有岡線主要県道宇和島中村線（バイパス）工事に伴う調査として実施されました。

この中世の城跡である塩塚城跡は本城である“里ノ城”と出城“タキモト城”から形成されており、一条氏、長宗我部氏の数多くの伝承から本市の城跡の中でも重要なものです。

これまで本市では栗本城跡、中村城跡、県内においても吉原城跡、久礼城跡、安芸城跡、芳原城跡、岡豊城跡等の調査が実施され、本調査を含め県下の中世城跡の様相が段々と明らかにされており、郷土史研究の上からも意義深いものであると思われます。

本書は発掘調査の成果をまとめたものであります。調査にあたりまして、高知県教育委員会、高知県土木部、中村土木工事事務所、市文化財保護審議会、関係機関、地元関係者また調査を担当された県教育委員会文化振興課山本哲也主事並びに作業に従事してくださった皆様方に厚く御礼申し上げ、本調査報告書が広くご活用いただき学術文化の向上に資することを期待し刊行のごあいさつといたします。

昭和62年3月30日

高知県中村市教育委員会

教育長 宮崎正臣

例　　言

1、 本書は、中村市教育委員会が高知県（高知県土木部道路課）から委託を受けて昭和61年度に実施した、県道川登有岡線、主要県道宇和島中村線新設工事に伴う塩塚城跡発掘調査の概要報告である。

2、 調査は、中村市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の指導を得て実施した。発掘調査体制は、次のとおりである。

団　長　　宮崎　正臣（中村市教育長）

副団長　　渡辺　一雄（高知県教育委員会文化振興課長）

調査主任　山本　哲也（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班主事）

調査委員　上岡　敏信（中村市文化財保護審議会会長）

〃　　　木村　剛朗（中村市文化財保護審議会副会長）

〃　　　西山　晴視（中村市文化財保護審議会委員）

総　務　　杉本　整史（中村市教育委員会社会教育課社会教育振興係長）

3、 本書で使用した図面のうち、第1図の上図は国土地理院発行5万分の1（おおゆうN 1-53-35-2）を、下図は、森林基本図中村市地形図（基の1、共38面）を、また、第2図は、県道川登有岡線平面図（高知県土木部作成、縮尺1,000分の1）を複製使用したものである。なお、方位は第1図が方眼北（G・N）で、第2図及び第3図を磁北（M・N）とした。

4、 遺構平面図及び発掘区周辺地形実測図の方位は磁北とした。また、地形実測図等のレベル高は海拔高度で、単位はメートルによるものである。なお、遺物実測図は第9図及び第10図を $\frac{1}{3}$ 縮尺に、第11図及び第12図を $\frac{1}{2}$ 縮尺に統一した。

5、 本書の編集及び執筆は山本哲也が担当した。

6、 今回の発掘調査については、地元関係者をはじめ数多くの方々の御協力をいただいた。文末ではあるが、記して厚くお礼申しあげたい。

（発掘調査）

植恵、土岐薰、伊与田俊男、市川巖、伊与田美喜恵、今倉信恵、西井美美子、西岡精喜、横山ますみ、高屋孝子、伊与田兎身子、倉本武、沖本充、大原純子
(整理作業及び報告書作成)

宮崎美和、山中裕子

（調査協力）

高知県道路課、中村土木事務所、中村市建設課、都市計画課、川登地区

本文目次

I 調査に至る経緯と経過.....	1
II 塩塚城跡の概要.....	3
III 調査の概要.....	7
1 調査の方法.....	7
2 各トレーンチの概要.....	7
IV 検出遺構.....	12
誌.....	12
北部郭.....	12
集石墓.....	14
V 出土遺物.....	16
VI まとめ.....	23
1 遺構について.....	23
2 遺物について.....	24

挿 図 目 次

- 第1図 調査地位置図
- 第2図 発掘区位置図
- 第3図 トレンチ設定図及び地形実測図
- 第4図 トレンチ断面図
- 第5図 トレンチ断面図
- 第6図 積柱穴跡検出状態図
- 第7図 集石墓遺物出土状態図
- 第8図 集石墓平面図及び断面図
- 第9図 出土遺物（青磁・白磁・近世陶磁器）
- 第10図 出土遺物（備前焼）
- 第11図 出土遺物（茶臼）
- 第12図 出土遺物（茶臼・石硯・鉄製品・銅製品）

図 版 目 次

- PL、1 調査地遠景（北から）
調査地遠景（西から）
- PL、2 伐採風景（東から）
詰西側斜面遠景（西から）
- PL、3 詰西側部（西から）
同上
- PL、4 詰西側段状部（東から）
詰近景（北から）
- PL、5 調査風景（北東から）
丘陵西側部（北から）
- PL、6 A Bトレンチ設定風景（東から）
Bトレンチ
- PL、7 Cトレンチ（西から）
C・Dトレンチ（南から）
- PL、8 詰西側斜面下段状部（南から）
Dトレンチ
- PL、11 Eトレンチ（北から）
Eトレンチ土層堆積状態（北から）
- PL、12 トレンチ設定状況（A～Bトレンチ）
Fトレンチ発掘風景（北東から）
- PL、13 集石墓検出状態（東から）
同上（南から）
- PL、14 集石墓・遺物出土状態（北東から）
墓塚検出状態（北から）
- PL、15 集石墓・墓塚（南から）
同上
- PL、16 Fトレンチ全景（北東から）
Fトレンチ完掘状態（南西から）
- PL、17 詰 Gトレンチ近景（北東から）
同上（北から）
- PL、18 詰・柱穴検出状態（北から）
同上
- PL、9 Eトレンチ調査風景（南から）
同上
- PL、10 Eトレンチ全景（南から）
同上（東から）
- PL、21 出土遺物（青磁）
- PL、22 ノ（近世陶磁器）
- PL、23 ノ（白磁、瀬戸天目茶碗・備前焼等）
- PL、24 ノ（備前焼瓶・壺）
- PL、25 ノ（備前焼壺）
- PL、26 ノ（茶臼）
- PL、27 ノ（石硯、鉄釘、銅製品）
- PL、19 北部郭近景（南西から）
北部郭及び空堀（西から）
- PL、20 北部郭 Hトレンチ近景（南から）
同上（北から）

I 調査に至る経緯と経過

しおづかこ

塙塙城跡は、中村市の北西部で四万十川（渡川）中流域にあたる中村市川登に所在する、中世の山城である。

川登地区は、渡川左岸の自然堤防上及び丘陵裾部に家屋の集中した世帯数約80の集落で、集落の南側には、中村市から西土佐村江川崎を経て愛媛県宇和島市へ至る主要県道宇和島中村線が、また、東側には、中村市有岡を国道56号線宿毛市方面の分岐点とした県道川登有岡線が通じている。

塙塙城跡（里の城）は、主要県道宇和島中村線と県道川登有岡線が交差する県道分岐点（川登分岐）の北側に接する丘陵上に位置しており、城跡の所在する丘陵の東側及び南側、西側裾部は宅地となっている。

川登地区の人家は、自然堤防上又は丘陵裾部などの比較的高い場所に集中しているが、これは、川登地区が地形上からみて低い土地に位置しており、周辺を流れる河川の氾濫による影響を受けやすい地理的条件によるものである。集落の側面を流れる四万十川（渡川）は、洪水期に氾濫し、支流である坂川、舟木川、五反田川が渡川の水位増加によってせかれてしまうために、毎年平均1回、川登地区の大半が水没して家屋、田畠等に甚大な被害を受けている。特に、昭和57年8月の台風13号時には、浸水家屋10軒をはじめ農地面積80haが冠水したうえ、全水害区域面積は100.1haに達した。また、同年の台風19号時には、浸水家屋3軒、水没農地面積60ha、全水害面積は68.0haにおよび、川登地区は台風13号及び19号によって多大な被害を被った。

川登地区の主要幹線道路である県道2路線は、河川氾濫時に深い所で6.5mも水没し、地形的な制約から、本流の水が引くまでは道路としての機能を果さず、交通は全面的に途絶する。川登地区では、永年の水害に対し、高所の避難場所及び交通手段の確保等を行い、山側部分への地区的な発展をはかることが切実な問題であり、具体的な対応策が講ぜられることを念願していた。

高知県では、高知県西部の主要な幹線道路である当該県道2路線を水没からなくして交通手段を確保するとともに、地元の要望に答えるために、県道の改良方策を検討した結果、新たに県道を新設することになった。なお、県道の水没を防ぐためには、道路敷高を平地より高くする必要が生じたため、現道の嵩上等が検討されたが、渡川の水位内水等の地形上の問題から困難であるため、渡川にかかる沈下橋を抜水橋に、道路を高地にバイパスすることとなり、県道2路線の交差点である川登分岐北側の丘陵を含めた山地を利用した法線が計画決定された。

ところで、川登分岐北側の丘陵部には、周知の埋蔵文化財包蔵地である塙塙城跡（里ノ城）が所在しており、当該土木工事等と埋蔵文化財の取り扱いが問題となり、昭和58年度末には高知県知事中内力から文化庁長官あてに、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく、埋蔵文化財包蔵地発掘の通知文書が提出された。

これを受けた中村市教育委員会では、昭和59年度に、高知県教育委員会及び高知県土木部道路課、中村土木事務所等と数回にわたる協議を実施し、関係機関の意見を聴取したうえで、基礎工事によって影響を受ける部分について記録保存のための発掘調査を実施することになった。また、高知県土木部道路課及び中村土木事務所では、城跡の詰及び詰北部の郭、堀切等を縦断する形になる当初計画のルートから、丘陵西側斜面部に法線を寄せたルートに設計変更を行った。なお、昭和60年度には、城跡周辺の工事対象地について用地買収が行われ、昭和61年度から高地部分のバイパス工事が施工されることになった。

工事に先立つ事前の発掘調査は、高知県土木部道路課及び中村土木事務所との協議の結果、中村市教育委員会が主体となり、高知県から受託して昭和61年度に実施することになり、高知県教育委員会の指導を得て、昭和61年11月25日から12月27日までの間に実施した。

調査対象地は、城跡詰部及び詰北側の郭部が平担地形であるものの、大半が丘陵の西側斜面部であり急傾斜地となっていることに加えて、斜面下には民家が接しており、発掘調査による排土処理に苦慮したが、城跡周辺の帶状の段状部を排土置場にすることによって、調査を完了することに至った。調査は、11月25日に調査機材等を搬入し立木伐採を行ったうえ、11月27日に調査の無事終了を祈願して慰靈祭を行い、遺構等の検出作業を開始した。調査期間は、約1ヶ月間を要したが、12月27日には図面点検及び調査機材の撤出を行い、発掘を終了した。調査終了後、出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書の作成作業を行った。



川登地区 災害状況（川登分岐周辺・西から）

〔資料提供・高知県中村土木事務所〕

II 塩塚城跡の概要

1 城跡の位置

塩塚城跡は、中村市川登字コエト山及び字横シリ山に所在し、字コエト山の城跡を「里の城」と、また、字横シリ山の城跡を「タキモト城」と呼びわけて呼称している。塩塚城跡のうち里の城は、塩塚城跡の本城で、これに対してタキモト城は里の城の出城と考えられている。里の城からタキモト城へは、丘陵伝いに移動することが可能で、タキモト城の方が高所にあり、タキモト城から里の城全体を一望することが可能である。里の城及びタキモト城とともに、標高548mの右城から南西方向に枝状に派生した舌状丘陵部の先端に位置しており、里の城の頂部は標高51.00m前後、タキモト城では標高90m前後を測ることができる。

2 城跡の内容

(1) 里の城

里の城は、詰・二ノヘイ・三ノヘイに該当する段状の平坦地及び空堀等が所在しており、形状は複郭である。地目は、詰部が丘陵頂部の平坦地で八幡宮社地となっており、二ノヘイ及び三ノヘイは、宅地、畑、山林、荒地等になっている。

詰部は、幅狭く細長い平坦地形を呈しており、南側には段状の平坦地形が接続し、北側には空堀及び郭（北部郭）がみられる。また、詰部の東側及び西側部は、勾配の強い傾斜面となっている。

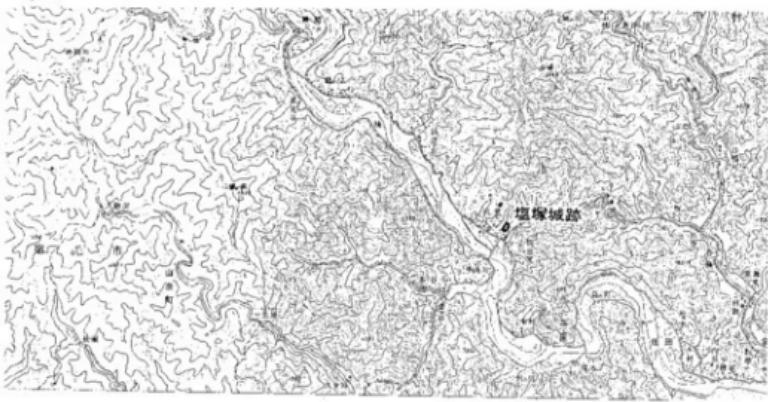
二ノヘイ及び三ノヘイは、詰部の南側及び西側の段状平坦地であるが、宅地化されており、後世の削平を強く受けている。なお、詰部及び二ノヘイ・三ノヘイともに、石垣及び土塁状地形はみられない。

北部郭は、詰部の北側に空堀を隔てて所在しており、頂部は長方形形状の平坦な地形を呈する。北部郭の東側及び西側は、丘陵裾に至る急傾斜地となっている。また、北側には、北西方向に続く丘陵部との間を掘り削った空堀の痕跡がみられる。なお、詰部北側の空堀及び北部郭北側の空堀は、丘陵裾に至るものではなく、丘陵頂部を分断した掘割である。

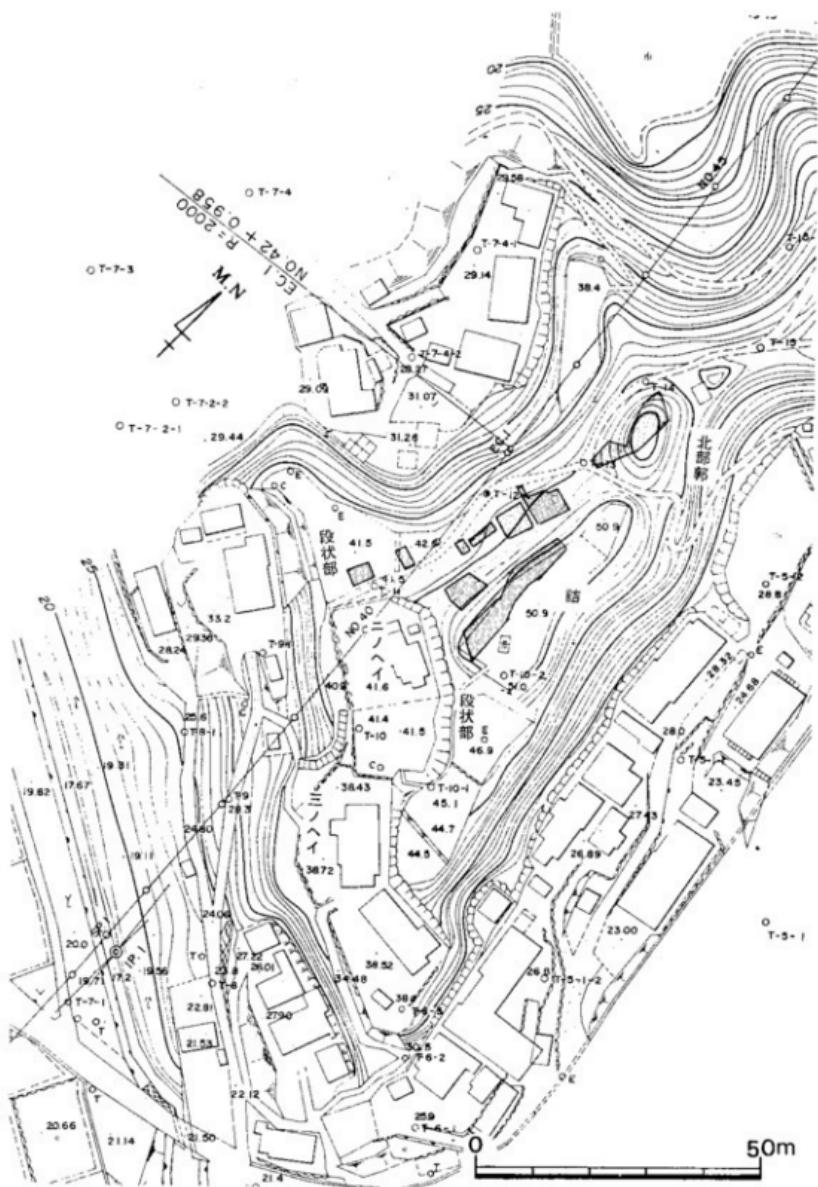
(2) タキモト城

タキモト城は、里の城から北西方向に約500m離れた地点に位置している。幅狭な丘陵頂部に、段状の平坦地がみられ、郭及び空堀が所在する。形状は単郭であり、現在社寺境内（金毘羅宮）となっている平坦地に、2郭からなる段状部が接続し、北端に東西方向の空堀が1本みられる。周囲は急傾斜地となっていて、タキモト城の北側背後は急峻な絶壁となっている。

タキモト城は、里の城を本城とした出城或いは見張所的な性格を持った場所であることが考えられ、里の城と築城者又は築造時期を異にした別個の城跡ではなく、里の城と共に塩塚城跡を構成し、役割を分担して、城跡の本質的な機能が生かされていたことが推測される。



第 1 図 調査位置図



第 2 図 発砲区位置図

3 城跡の歴史的環境

塩塚城跡は、一条氏支配下及び長宗我部氏支配下において、数人の城主が交替したことが、後世に伝わる軍記物、物語、古文書、伝承等により知らされている。

塩塚城跡の築城者は、敷地氏であったことが伝えられているが、正確なところは不明である。『敷地軍記』及び「敷地左兵衛尉康但先祖書」（『南路志』所収）によれば、天文二年（1533年）に、敷地民部少輔藤康が、一条家の老臣のざん言によって、一条房冬により賜死をうけ、タキモト城において自刃したことが記されている。敷地氏は、『長宗我部地検帳』等から、中村市式地本村に所在する敷地城を本城とし、川登郷、三原郷、敷地で五千貫を領した豪族であり、塩塚城跡も敷地氏の出城であったと伝えられている。また、『大海集』及び『土佐国編年記事略』では、天正3年（1575年）の一条兼定と長宗我部元親勢との合戦時に、一条方の部将であった岡村権五郎が、塩塚城跡において長宗我部勢の攻撃によって討死したことが記載されている。また、長宗我部氏の支配後は、『長宗我部地検帳』や地元に伝わる先祖書等の古文書、伝承等から、奥村織部、伊与田兵庫守などが、塩塚城跡に居城していたことが伝えられている。

塩塚城跡をめぐる居城者の変遷は、城跡とともに展開した戦国時代の社会を背景とするものであり、今日まで伝わる古文書、伝承等によって、一条氏支配下、一条氏と長宗我部氏との軍事的緊張時、長宗我部氏支配後における塩塚城跡の位置付けをうかがうことができる。

塩塚城跡は、伊与及び北幡、中村、宿毛方面への交通路の拠点に位置することから、一条氏及び長宗我部氏にとって、軍事的及び政治的、経済的に重要視されていたものと考えられ、長宗我部支配後においても、城跡の管理を行うために家臣が番将及び城番として配置され、城跡の周辺に一領具足として所領が与えられて、居住地域となったことが考えられる。

居城者	存続期間	歴史及び伝承	出典	備考
敷地氏	~16世紀		敷地軍記等	築城者か
敷地民部少輔藤康	天文二9年2月15日	無実を知った一条方が切腹中止を伝えに急いだが、既に遅かった。	敷地軍記 南路志所収敷地左兵衛尉康但先祖書	一条房冬にあって賜死（タキモト城にて）
岡村権五郎	天正三年		大海集	一条方の部将、長宗我部勢により討死
奥村織部			土佐国編年記事略	
伊与田兵庫守		城番として在城の伝承が地元に伝わる	土佐物語	城番か

参考文献 『中村市史』

『日本城郭大系』第15巻

『十和村史』

『土佐史談』

『高知県中世城館分布調査報告書』

III 調査の概要

1 調査の方法

調査対象地は、塩塚城跡（里の城）の西側斜面部で、工事対象区域について発掘調査を実施した。調査地の地番は、中村市川登字里ノシロ、字コエト山である。

調査は、立木伐採後にトレント方式で発掘区を設定したうえ、人力で遺構の検出作業を行った。発掘区は、N E 54°の基本線を基にして任意に設定し、A～Hトレントの名称を冠した。

調査用の基準杭は、工事用地形測量図（縮尺 $\frac{1}{200}$ ）作成時に設定された測量杭及び工事用基本杭を使用して、海拔高度を求めた。発掘区については、土層断面図及び遺構平面図（縮尺 $\frac{1}{20}$ ）を作成し、併せて発掘区周辺の地形測量（縮尺 $\frac{1}{200}$ ）を実施した。

発掘調査は、Aトレントから順に開始して、Hトレントの調査をもって終了した。調査期間は、昭和61年11月25日から12月27日までの32日間であり、総発掘面積は、約400m²である。

なお、調査終了後に遺物整理作業等を実施した。

2 各トレントの概要

Aトレント

Aトレントは、二ノヘイに該当する段状の平坦地に設定した幅3m長さ4mの発掘区である。基本層序は、第I層暗褐色腐植土、第II層褐色砂礫土、第III層黄褐色粘礫土（岩盤風化土）で、堆積厚は16~20cmと浅かった。第I層及び第II層は、畑の耕作土である。第III層は地山で、上面は平坦面となっていて、標高41.240mをはかる。遺構及び遺物は検出されなかった。

Bトレント

Bトレントは、Aトレントの北東部に設定した幅2.00m長さ3.60mの発掘区である。基本層序は、第I層表土で暗褐色腐植土、第II層褐色砂礫土、第III層黄褐色粘礫土で地山土である。

第I層及び第II層中から、青磁及び備前焼窯片、石硯、近世陶磁器片が出土した。第III層上面は、西側へ向かって緩やかに傾斜している。遺構の所在は確認されなかった。

Cトレント

諸西側斜面裾に設定した発掘区で、幅1.60m長さ2.40mを測る。

基本層序は、第I層表土で褐色腐植土、第II層茶褐色砂礫土、第III層明茶色砂礫土、第IV層黄褐色粘礫土（岩盤）で地山土である。

Cトレントの中央部から西側にかけては、第IV層上面が平坦な面を呈している。第IV層上面は、標高42.00mを測り、Aトレントとの比高差は約80cmである。遺構及び遺物包含層は検出されなかった。

D トレンチ

詰西側斜面下の段状部南側に設けた発掘区で、幅1.60m長さ5.00mを測る。

基本層序は、C トレンチと同様な堆積土がみられ、第Ⅳ層は南側へ約40°の勾配をもって傾斜している。D トレンチ南端では、標高42.25mのコンターがめぐり、トレンチ北端では標高44.25mのコンターがみられた。トレンチ南端と北端の比高差は、2.00mである。

遺構及び遺物包含層は検出されなかったが、第4層上面は地山を人為的に整形したものと考えられる。

E トレンチ

詰西側斜面下の段状部の平坦面に設けた発掘区である。この段状部は、城跡の郭の一部と考えられる地形を呈しており、平坦面に遺構が所在することが想定されていた。

基本層序は、第Ⅰ層表土で褐色腐植土、第Ⅱ層茶褐色砂礫土、第Ⅲ層明茶色砂礫土、第Ⅳ層茶色砂礫土、第Ⅴ層明茶色砂礫土、第Ⅵ層黄褐色粘礫土で地山土である。

トレンチ中央部の第Ⅳ層上面は、標高44.75mを測りほぼ平坦な面を呈するが、トレンチ西側では、約45°の勾配をもって西に向いて傾斜している。

第Ⅰ層及び第Ⅱ層中からは、近世陶磁器片と共に、茶白、石硯、青磁等の戦国時代に属する遺物が出土した。また、第Ⅲ層～第Ⅵ層上面にかけては、近世以降の遺物の混入はみられず、青磁、白磁、備前焼壺片、土師質土器片等の戦国時代に属する遺物が出土した。

E トレンチからは、柱穴及び礎石等の建物跡関連遺構及び石垣、土塁状遺構、溝等は検出されなかったが、第Ⅳ層上面は地山を人為的に整形したものであることが考えられ、段状の平坦部は城跡の郭の一部であった可能性が強い。

F トレンチ

詰西側斜面下の段状部に設定した発掘区で、集石墓が検出された。

基本層序は、第Ⅰ層表土で褐色腐植土、第Ⅱ層茶褐色砂礫土、第Ⅲ層黄褐色粘礫土で地山土である。遺構は表土下約30cmで検出された。

遺構検出に伴い、F トレンチを南側へ拡張したが、他の遺構は検出されなかった。遺構上面の集石土中からは、備前焼壺、甕片をはじめ、青磁、天目茶碗、茶臼等が出土した。

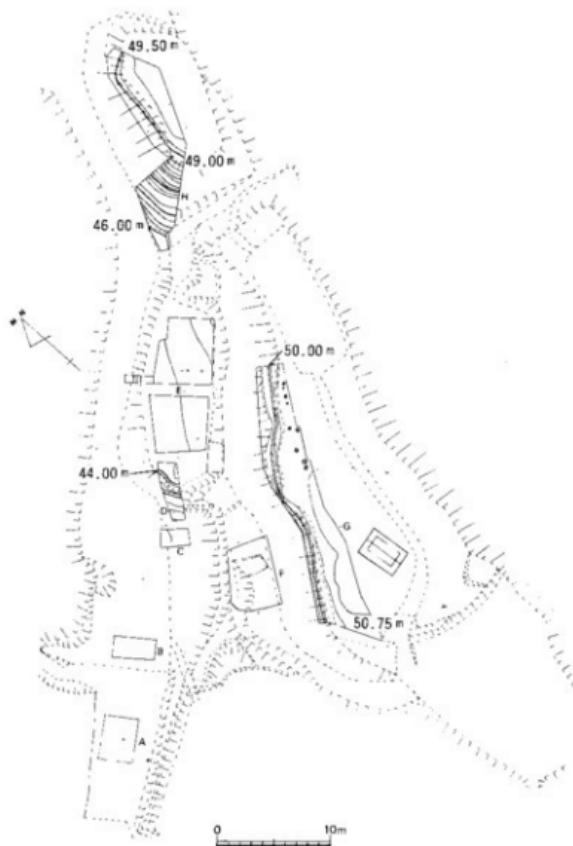
G トレンチ

詰に設定した発掘区で、トレンチ北端から9個の柱穴が検出された。

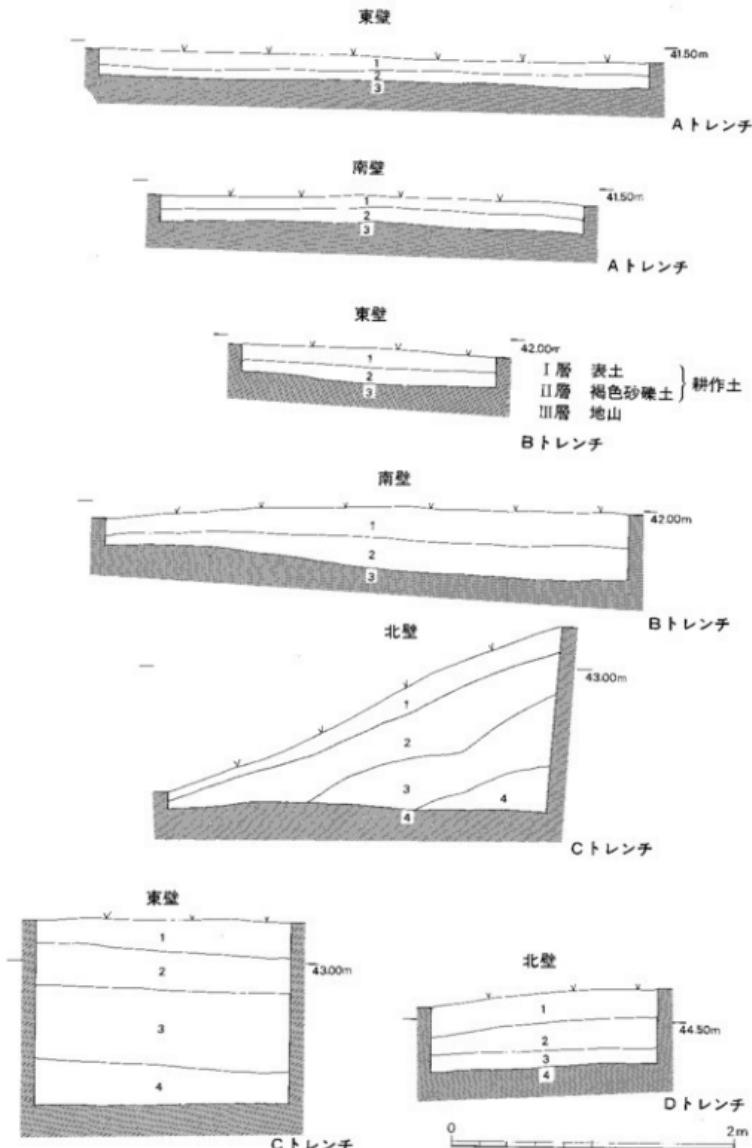
堆積土は、地山（黄褐色粘礫土）上に、第Ⅰ層褐色腐植土、第Ⅱ層茶褐色砂礫土がみられたが、堆積厚は薄かった。第Ⅰ層及び第Ⅱ層中からは、近世陶磁器片のほかに、青磁・備前焼壺片が出土した。なお、柱穴以外の遺構は検出されなかった。

Hトレンチ

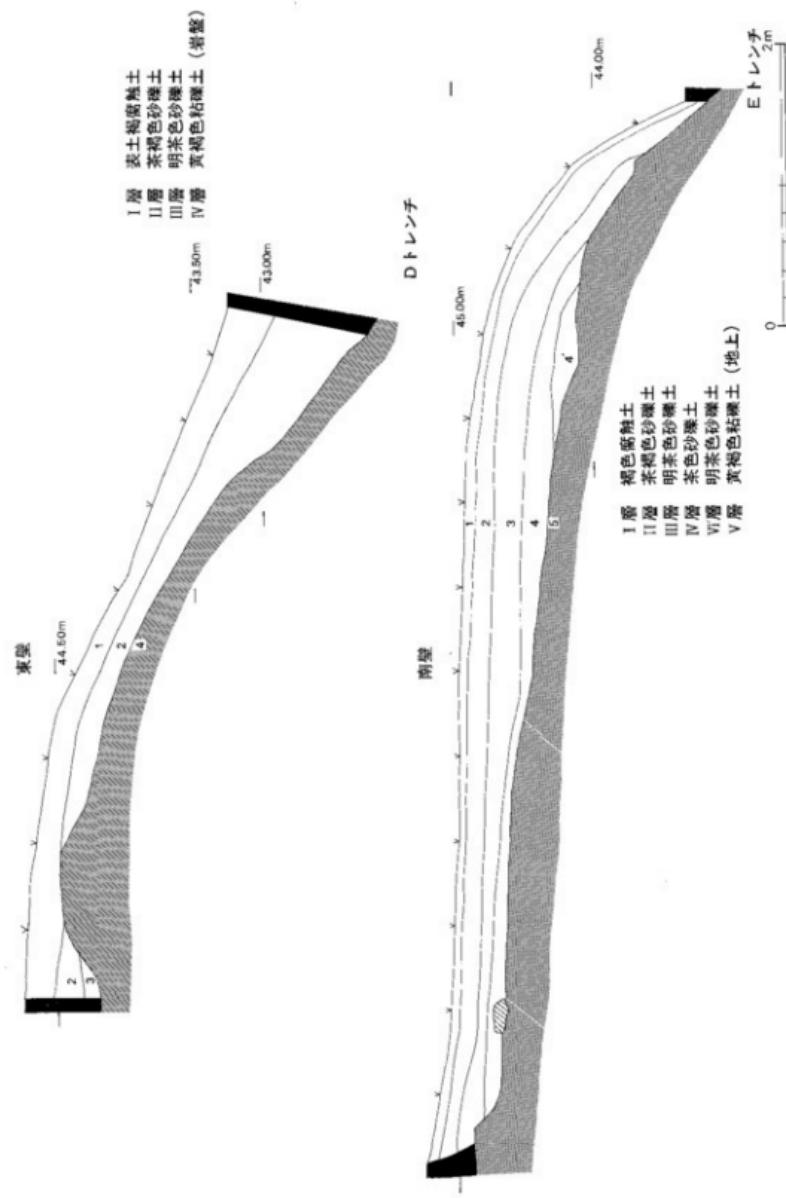
北部郭に設定した発掘区である。基本層序は、第I層表土で褐色腐植土、第II層茶褐色砂礫土、第III層黄褐色粘土（地山土）である。Hトレンチからは、柱穴及び礎石等の掘立柱関連遺構は検出されず、石垣、土壘状遺構等も確認されなかった。



第3図 トレンチ設定図及び地形実測図



第 4 図 トレンチ断面図



第 6 図 テレンチ断面図

IV 検出遺構

詰に設定したGトレンチの北端から柱穴が、また詰西側の段状部に設けたFトレンチから集石墓が検出された。なお、詰北側の北部郭に設けたHトレンチ及び詰西側斜面下のEトレンチからは、柱穴及び礎石等の遺構は検出されなかった。また、段状の平坦地に設定した発掘区であるA～Dトレンチからも遺構は検出されず、石垣及び土壘状遺構等の存在は認められなかった。

詰 (第6図)

詰南東部について、平坦地形の約 $\frac{1}{3}$ に相当する範囲を発掘し、発掘区の北端において柱穴9個を検出した。

詰は、表土下約30cmで地山に至り、堆積土厚は薄かった。詰の西端は、標高50.50mのセンターがめぐり、標高50.50mから50.75mのセンター間は、平坦な地形を呈していた。なお、土壘状遺構、溝、石垣等は検出されなかった。

柱穴は、詰周縁部において、1×9mの範囲内で検出された。地山を掘り込んで形成されており、淡黄褐色粘質土が堆積していた。柱穴の切り合はみられなかつたが、柱穴間が近接しているものがあり、数期にわたって掘削されたことが考えられる。柱穴の直径は、24～30cm前後で、深さは30～50cmの範囲内であった。また、柱穴の一部からは、備前焼壺片が出土した。

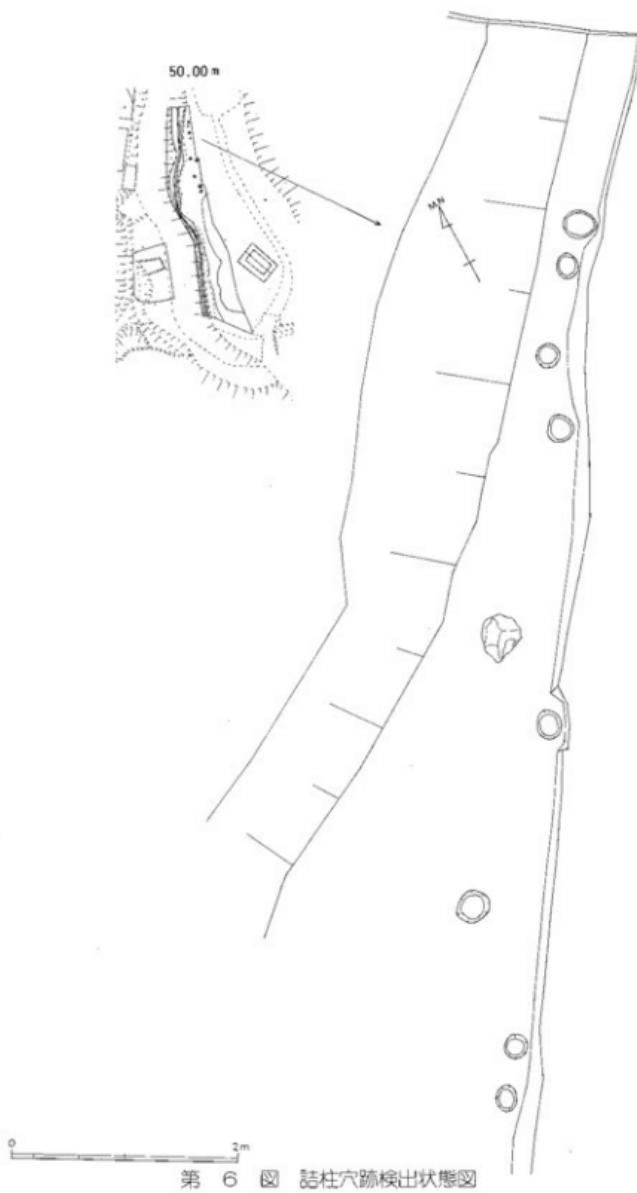
検出された柱穴は、掘立柱建物跡に伴うものであり、詰において掘立柱建物が所在していたことが明らかとなつた。また、柱穴の検出状況からみて、数回建直しが行われていたことが考えられる。

北部郭

北部郭は、詰の北側に空堀を隔てて位置するもので、今回の調査において全体の約 $\frac{1}{2}$ を発掘した。北部郭には、幅5m長さ12mを測る平坦地がみられ、柱穴及び礎石等の遺構の存在が想定されたが、Hトレンチの調査では、遺構等の所在は認められなかつた。

北部郭は、表土下約25～30cmで地山に至るもので、西側周縁部は標高49.00mのセンターがめぐる。平坦部には、標高49.50のセンターラインがみられ、頂部は標高49.670mを測る。詰との比高差は、約1.10mで、北部郭の方が低くなっている。また、北部郭西南隅では、標高45.00mのセンターがみられ、郭南側の空堀へと続いている。空堀の西端では、深い掘り込みはみられず、西側に延びる縱堀にはなつていなかつた。

北部郭の調査からは、石垣及び土壘等の構築物は確認されず、郭は、地山を整形した長方形形状の壇状部であったことが判明した。また、郭南側の空堀については、丘陵を掘り割って詰と分断したものであることが明らかとなつた。なお、郭北側の空堀についても、南側の空堀と同様に、尾根を分断した堀割であるものと考えられる。



第 6 図 詰柱穴跡検出状態図

集石墓（第7図・8図）

詰西側斜面下の段状部に設定したFトレンチから検出されたもので、火葬墓であると考えられるものである。

表土下約30cmで、輸入陶磁器、儀前焼壺、甕片、茶臼等を含む集石が確認され、集石下に墓壙が検出された。

墓壙は、北側の長辺2.34m、南側の長辺2.00m、幅1.30m前後を測るもので、深さは40~46cmであった。地山を穿って墓壙としたもので、墓壙北側及び南側壁の一部は熱を受けて焼土化していた。また、墓壙基底部上にも集石がみられ、集石中の一部の石は、赤色に変色していた。墓壙内の堆積土は、木炭片を多量に含んだ茶褐色土で、堆積土中には細片化した骨片が含まれていた。

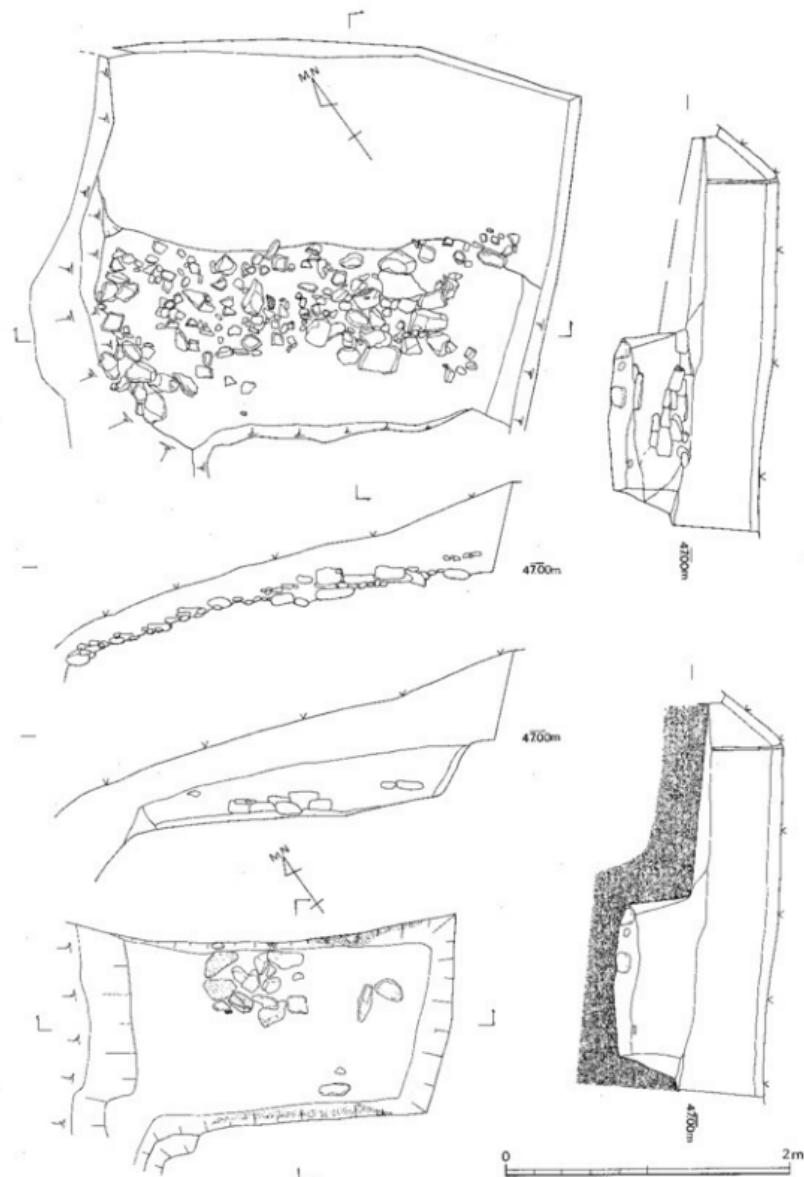
墓壙内からは、木炭及び骨片のほか、鉄釘、銅製品（第12図48~50）が出土した。

遺構の検出状況からみて、遺体を納めた棺を墓壙内に置いた後、火葬に付したうえで、墓壙上に積石を行ったことが考えられるが、焼土が墓壙基底面に及ばず、壁面だけに認められることから、火葬骨を納めた棺を埋納して積石を行ったものが、二次的に火を受けた可能性も考えられる。なお、墓壙周辺からは、五輪塔等の墓標の存在は確認されなかった。

出土遺物には、近世以降の遺物が含まれておらず、集石中から出土した土器が墓に伴う供獻用の土器であるとすれば、集石墓の形成は戦国時代に行われたものと考えられる。



第7図 集石墓遺物出土状態図



第 8 図 集石墓平面図及び断面図

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師質土器、備前焼、青磁、白磁、備前焼、天目茶碗、近世陶磁器、石硯、茶臼、鉄釘、銅製品、木炭、骨片等である。

出土遺物のなかでは、備前焼壺及び甕の出土点数が多かったが、土師質土器については、細片の土器片が數点認められただけであった。

遺物は、詰西側斜面下の段状平坦地に設定した発掘区（B及びE、Fトレンチ）から出土したもののが大半で、Bトレンチからは近世陶磁器が多く出土した。また、詰からは少量の青磁、備前焼壺及び甕片が出土したが、詰北側の北部郭からは遺物の出土はみられなかった。

土師質土器

土師質土器は、EトレンチII層及びIII層中から3点出土した。椀又は皿の体部片と考えられるもので、いずれも2×2cm前後の細片の土器片である。精選された胎土をもち、砂粒の混入はみられない。全体的に軟質で、色調は浅黄橙色を呈する。ロクロ成形によるものと観察される。破片であることから、形態については不明であるが、胎土及び色調からは中村城跡出土の土師質土器に類似している。

輸入陶磁器（第9図1～16）

青磁（1～15）

碗（1～9）

1は、外面にヘラ先による剣頭と線描の細蓮弁文がみられ、体部下半を欠いている。2の外面には、ヘラ先による剣頭と丸のみ状工具による蓮弁文が施され、体部下半を欠く。1及び2の口縁端部は丸みを持つ。3は、口縁端部が外半する碗であり、体部上半に強いロクロナデが施されている。4及び8は外面に片切彫りの蓮弁文が施されているが、8の蓮弁文は幅広く肉太である。5及び6は剣頭をもつ蓮弁文が施され、6には丸のみ状工具が使用されている。また、7には、外面口縁下端にヘラ先による一条の線描をもつ。9は、碗底部の破片であり、見込に菊花文が施され、高台外面まで施釉されている。

香炉（10）

香炉の口縁端部片である。玉縁状の口縁部をもつ。内面は、口縁端部を除いて施釉されていない。

稜花皿（11～14）

口縁端部が稜花形に刻まれているもので、11の口縁部は直線的に外反し尖り気味の口縁端部をもつが、12～14の口縁端部は外反して丸みを持つものである。

皿（15）

碗底部の破片であり、高台外面まで施釉されている。浅黄色を呈し、ゴマ状の発色がみら

れる。

白磁 (16)

黄白色の釉がかけられた高台付の碗である。施釉は、内面が全面に、外面は体部下半一部高台まで施されている。見込みに目あとが残り、高台は削り出し高台でアーチ状高台を呈する。EトレンチIII層下で出土した。

国産陶磁器 (第9図17~26、第10図27~42)

天目茶碗 (17)

瀬戸産の天目茶碗で、内外面に暗茶褐色の釉がかけられている。露胎部には化粧がけが施されている。Eトレンチで検出された集石墓の集石中から出土した。

備前焼 (27~42)

檻鉢 (27~29)

27は体部下半の破片で、28及び29は口縁部片である。27の内面には、8本を1単位とする条線が施されている。28及び29の口縁部は、上下に拡張されたもので、外面に2本の凹線が施されている。

壺 (30~34)

30は口縁部片で、他は底部片である。30は、肩部から垂直に立ち上り玉縁状の口縁部を持ち、内外面にロクロナデが施されている。31~34は、底面が平坦な底部で、31、32、34の外面には1~3本の沈線をもつ。内外面共にロクロナデが施されている。

甕 (35~42)

35~39は口縁部片で、40~42は底部片である。35~39の口縁部は橢円形を呈し、口縁端部は外側へ折り曲げられて玉縁状となっている。内外面共にロクロナデが施されている。38、39、42は大甕の部類に属する。

近世陶磁器 (第9図18~26)

18、23、24は碗、19~22は皿で、25及び26は土瓶である。18~22は伊万里焼であるが、23~25は産地不明。26は、いわゆる青土瓶と呼称される能茶山焼と考えられる。19の見込みは蛇ノ目状で、20の内面は無釉であり疊付にかかっている釉を削り取っている。21は紅皿である。22の底部は穿孔されており、皿の範囲中で取り扱ったが、形態は不明である。また、25は土瓶の底部で、26は蓋である。

石製品 (第11図46、47、第12図43~45)

硯 (43、44)

43及び44共に、方形硯である。43は、両面が使用されているが、44は片面使用である。43の石質は、赤色の凝灰岩であり、赤間石と考えられる。使用痕が顕著である。44には、海部の一

部分が残っている。43は、Bトレンチから、また、44はEトレンチI～II層から出土した。

茶臼 (45～47)

45～47は、砂岩製の茶臼である。46は上臼の破片で、直径19.6cmを測る。また、45は直径18.8cm前後であったことが復元されるが、47と同様に全体の形状は不明である。45及び46の刻み目の溝は、周縁にまで達している。46の挽手穴には、菱形の飾模様をもつ。45～47共に、強く火を受けた痕跡を残す。

鉄製品 (第12図48、49)

48及び49は、Fトレンチの集石墓中から出土した鉄釘である。48の断面は方形であるが、49は長方形である。49は、長さ 6.2cmを測る。墓壙のなかに納められた棺材をとめた釘である可能性が強い。

銅製品 (第12図50)

破片であり、元の形状については不明である。厚さ 2mmの銅板を使用したもので、一端は内側へ折れ曲っている。また、側縁部から幅 1.5cmにわたって段状になっている。筒金具の一種であることが推測されるが、用途等については不明である。Fトレンチ集石墓中から出土した。

出土遺物について

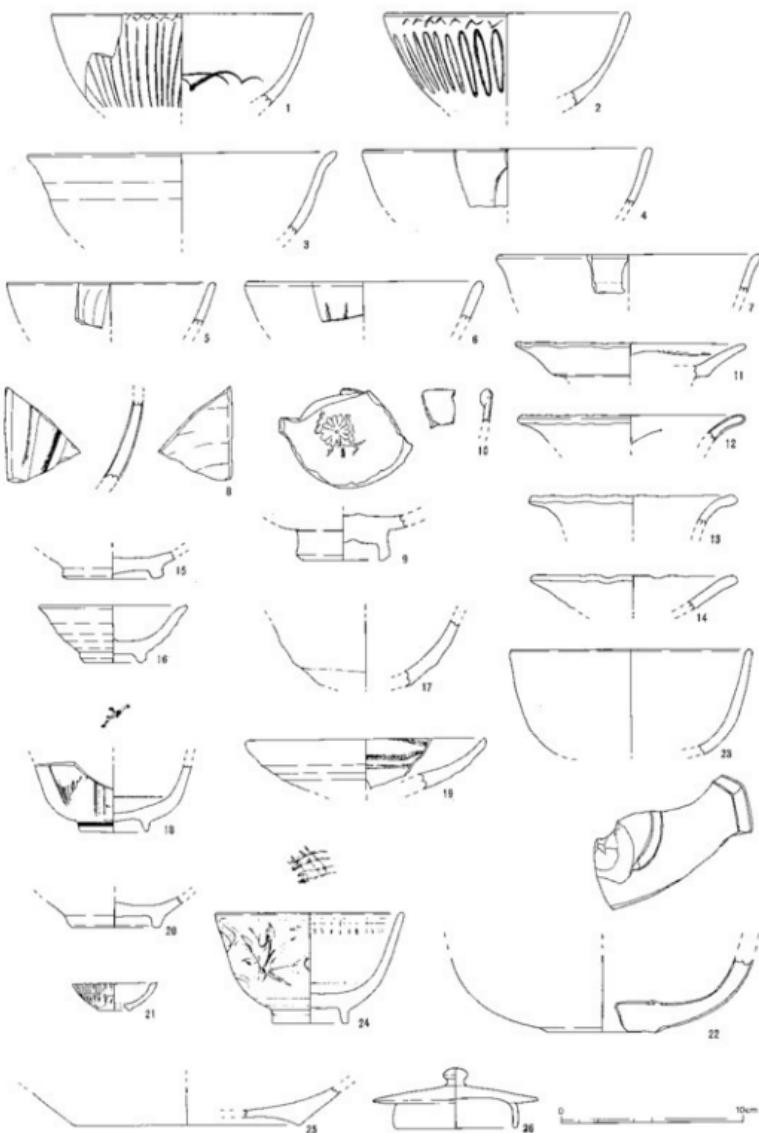
遺物は、詰及び詰西側斜面下の段状平坦地から出土しているが、戦国時代～江戸時代に属する輸入陶磁器、国産陶磁器、土師質土器などの容器類と石製品、鉄製品、銅製品が出土している。

輸入陶磁器のなかで、青磁は碗類が多く、統いて皿類の出土が認められ、香炉の破片が1点出土した。白磁は、碗(16)が1点みられたのみで、出土点数は極めて少ない傾向を呈していた。また、染付の出土がみられなかった。

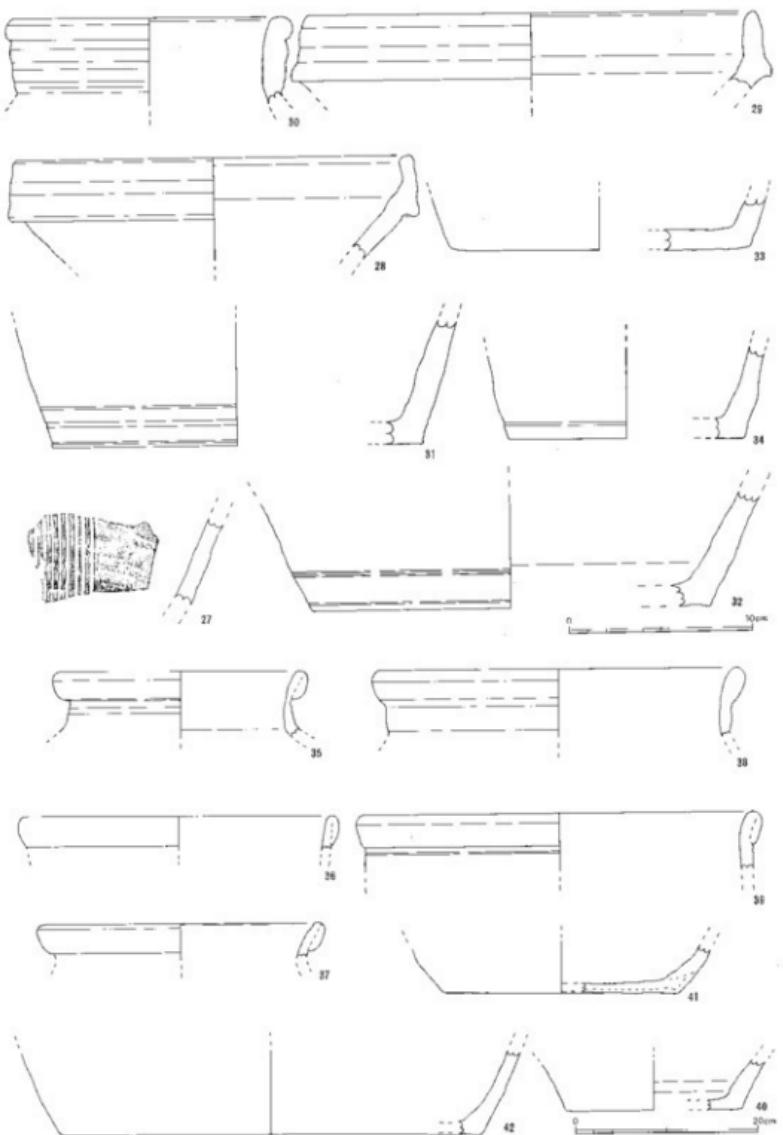
青磁については、形態及び成形技法上の特徴から数時期に細分することが可能であり、8が最も古く15世紀中頃～後半に、3、4、6が15世紀後半に、1、2、5、7、10、11～14は15世紀末から16世紀前半にかけて所属時期を求めることができよう。また、備前焼については、備前IV～V期に位置づけられるもので、15世紀後半～16世紀に属するものであると考えられる。

Fトレンチの集石墓中からは、青磁(1、9)、天目茶碗(15)備前焼(31、33、38、39、41、42)、石製品(46)、鉄製品(48、49)、銅製品(50)が、墓壙上の集石中から出土した。出土遺物のうち、陶磁器類は、15世紀末～16世紀前半に位置づけられるものと考えられ、集石墓の形成時期は戦国時代中頃～後半であることが推測される。

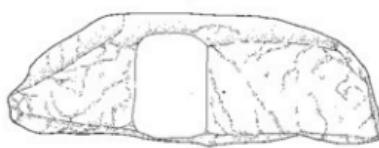
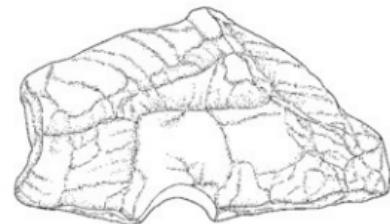
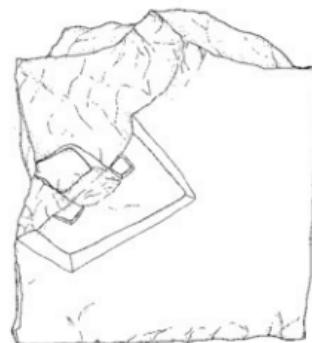
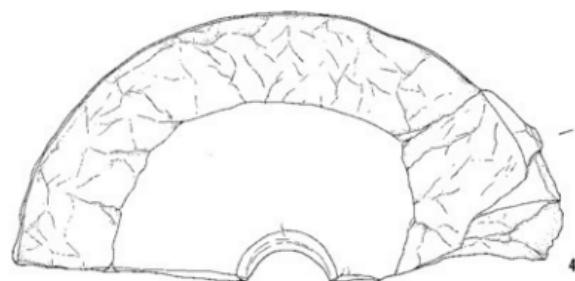
近世陶磁器は、18世紀に比定されるもの(18、21、23)、18世紀後半から19世紀に至るもの(24)が出土しており、江戸時代中期から後半にかけて、城跡周辺の段状平坦地を利用した耕作が盛んに行われたことがうかがわれる。江戸時代における耕作によって、詰西側の地形が大幅に改変されて行ったものと考えられる。



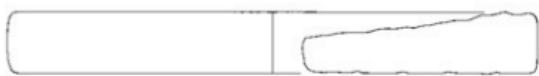
第 9 図 出土遺物（青磁・白磁・近世陶磁器）



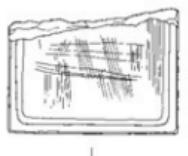
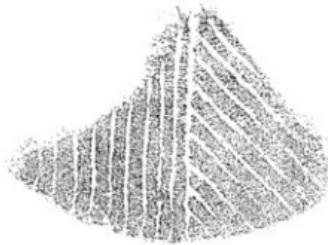
第 10 図 出土遺物（備前焼）



第 11 図 出土遺物（茶臼）



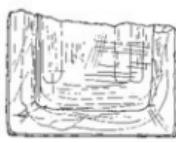
45



1



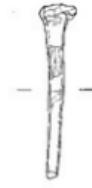
43



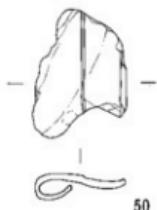
44



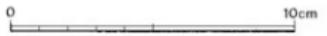
48



49



50



第 12 図 出土遺物（茶臼・石硯・鉄製品・銅製品）

VI まとめ

塙城跡は、「里の城」と「タキモト城」の総称であり、このうち、「里の城」は、詰、二ノヘイ、三ノヘイに相当する地形をもった複郭構造の城跡で、本城と考えられるものであり、また、「タキモト城」は単郭構造で「里の城」の出城又は見張り所と推測される城跡である。

今回の発掘調査の対象地は、「里の城」と呼称されている城跡の西側斜面部で、詰及び詰周辺部の段状地形、北部郭について発掘区を設定し、調査を実施した。

塙城跡（里の城）については、これまで、古文献に記載された内容及び地元に伝わる伝承等から城跡の内容について論じられたことはあるものの、発掘調査等の具体的な調査は実施されではおらず、城跡の内容及び性格については明らかにされてはいなかった。今回の調査は、城跡の部分的な発掘調査ではあったものの、城跡の概要を探るうえで新たな知見が得られた。

発掘調査で得られた成果と今後の問題点にふれて、まとめとしたい。

1. 造構について

詰に設定したGトレーナーから柱穴9個が、また、詰西側斜面下の段状部に設けたFトレーナーから集石墓が検出され、以下の諸点が明らかとなった。

- (1) 詰から検出された柱穴跡は、掘立柱建物址に伴うもので、詰に建物址が存在していたことが明らかとなった。柱穴跡は、直径24~30cmを測るもので、検出状況からみて数回にわたって遺構形成が行われたことが考えられる。柱穴跡のなかには、埋土中に備前焼壺の細片を含むものがみられたことから、戦国時代に形成された遺構であると判断される。柱穴跡の検出範囲は、Gトレーナー北端部に限定されていることから、詰中央部北側に小規模な掘立小屋等が建てられていた可能性が強い。なお、建物址の規模及び内容については、発掘区が限定されていることもあり、明らかにすることはできなかった。また、Gトレーナーからは、柱穴跡の他に遺構は検出されなかった。
- (2) Fトレーナーから検出された集石墓は、詰西側斜面下の段状部に形成されたもので、地山を掘り込み墓壠とした火葬墓であったものと考えられる。墓壠内の堆積土中には、多量の木炭片と細片の骨片が含まれ、鉄釘、銅製品が出土した。また墓壠上には、拳大の河原石の集石がみられ、青磁、備前焼壺、甕、天目茶碗片が散在していた。なお、集石のなかには半載された茶白片が転用されていた。

集石中から出土した遺物は、15世紀末~16世紀前半に位置付けられるもので、出土遺

物が墓に伴う供獻用の土器等であるとするならば、集石墓は戦国時代に形成された墓であることが考えられる。しかし、集石墓の位置は、既に近接した周辺部であり、城跡が機能していた時期に一般的に城跡の主要郭の周辺に造墓が行われているか否か、今後検討する必要があろう。また、Fトレンチにおいては、他の遺構は検出されておらず、集石墓は単独に造墓されていることがうかがわれる。

(3) 話西側斜面裾の段状部及び北部郭からは、柱穴及び礎石、石垣、土壘状遺構、溝等は検出されなかった。

北部郭は、丘陵尾根部を整形して長方形状の壇状部としたもので、上部は平坦な地形を呈する。柱穴等の遺構は検出されず、建物址等は構築されてはいなかつたものと考えられる。

話西側斜面裾の段状部（Eトレンチ設定部）では、遺構等は検出されなかつたものの第III層から地山層にかけて、戦国時代の遺物が出土した。段状部の中央部は、平坦な地形を呈しているが、段状部の南側、西側周辺部は、地山を整形したと考えられる傾斜面を持つ。Eトレンチの調査内容から、段状部は城跡の郭の一つとして機能していたことが考えられる。なお、柱穴跡はみられなかつたが、段状部に礎石建物址が所在していた可能性も考えられる。

2、遺物について

今回の調査で出土した遺物は、輸入陶磁器、国産陶磁器、土師質土器、石製品、鉄製品、銅製品、近世陶磁器がみられた。

輸入陶磁器については、青磁碗、稜花皿、皿、香炉片が出土したが、白磁の出土量は少なかつた。また、染付の出土はみられなかつた。青磁は、①15世紀中頃～後半②15世紀後半③15世紀末～16世紀前半に属するものがみられ、15世紀末～16世紀前半に所属する遺物の出土量が多かった。

国産陶磁器では、備前焼の出土量が多かった。備前焼は、壺、甕が大半で、擂鉢の出土量は極めて少なかつた。近世陶磁器は、18世紀代に比定される今里焼が多かった。出土した近世陶磁器は、話周辺の段状平坦地を開墾した際に持ち込まれたものと考えられる。なお、土師質土器はほとんど出土しなかつた。

石製品では、石硯及び茶臼が出土した。石硯は、使用された痕跡が著しく、頻繁に用いられていたようである。また、茶臼のうち46は、集石墓の集石中から検出された。この他、鉄製品（鉄釘）、銅製品が集石墓の墓壙内から出土した。

図版



調査地遠景（「タキモト城」から眺める、北から）



調査地遠景（西から）



伐採風景(東から)



詰西側斜面遠景(西から)



詰 西側部（西から）



詰 西側部（西から）



詰 西側設状部（東から）



詰 近景（北から）



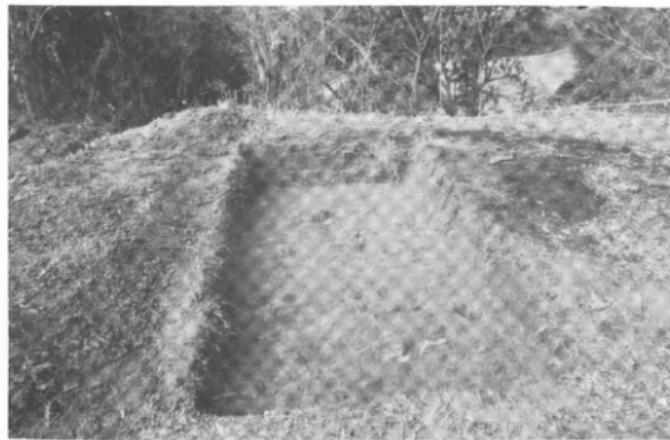
調査風景（北東から）



丘陵西側部（北から）



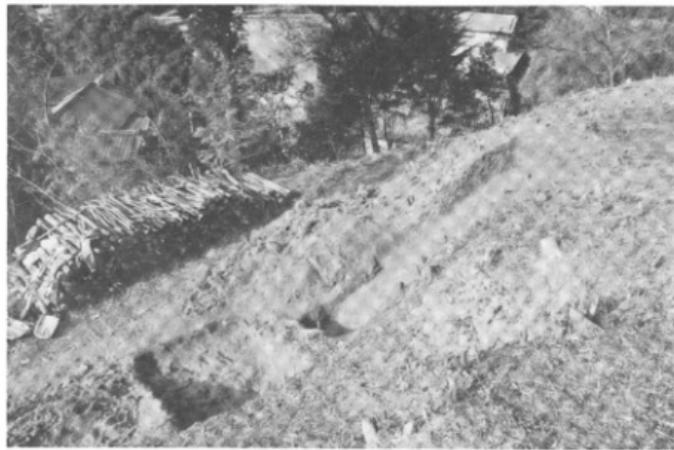
A・Bトレーンチ設定風景（東から）



B トレーンチ（東から）



C トレンチ (西から)



C + D トレンチ (南から)



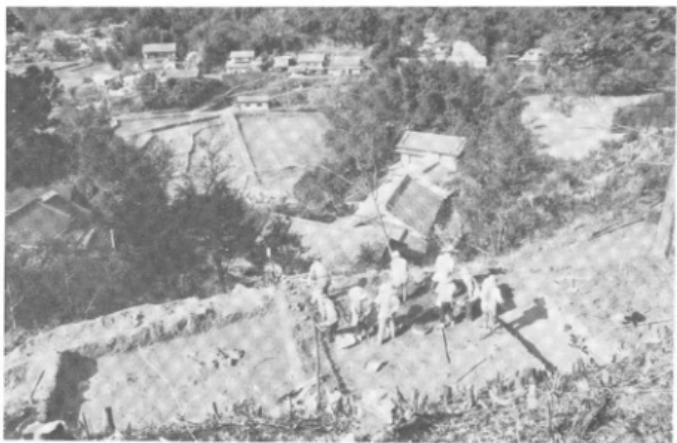
詰西側斜面下 段状部（南から）



D トレンチ（南から）



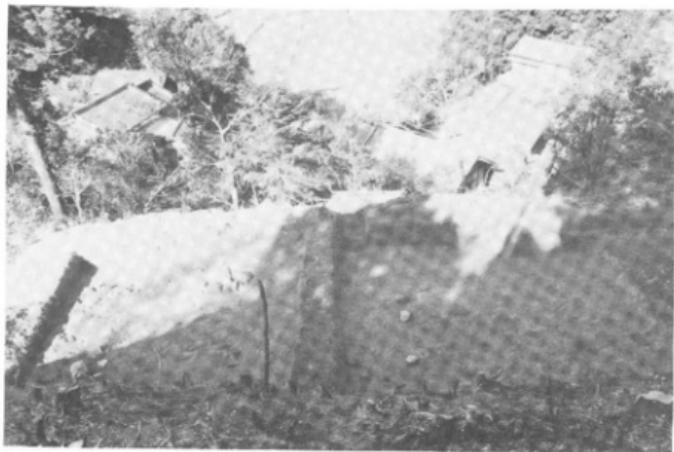
Eトレンチ調査風景（南から）



Eトレンチ調査風景（東から）



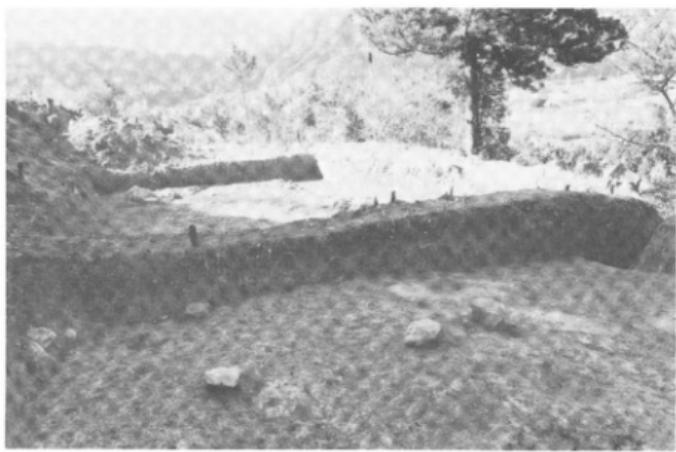
Eトレンチ全景（南から）



Eトレンチ全景（東から）



Eトレンチ（北から）



Eトレンチ土層堆積状態（北から）



トレンチ設定期況（A～ロトレンチ）



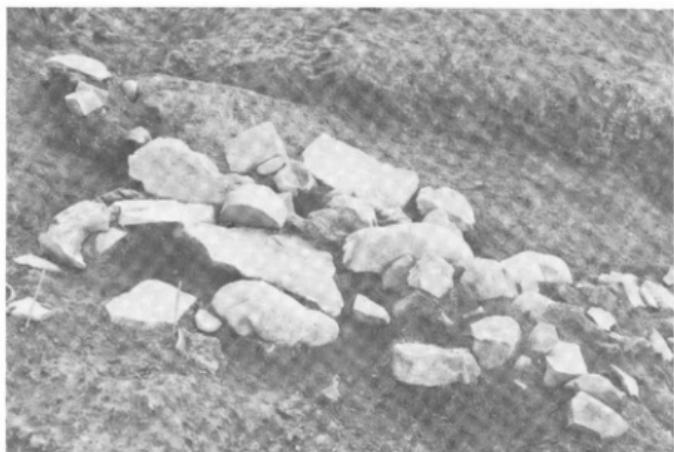
Fトレンチ発掘風景（北東から）



集石墓 検出状態（東から）



集石墓 検出状態（南から）



集石墓 遺物出土状態（北東から）



墓壙 検出状態（北から）



集 石 墓 墓 塚 (南から)



集 石 墓 墓 塚 (南から)



Fトレンチ全景（北東から）



Fトレンチ完成状態（南西から）



誌・Gトレンチ近景（北東から）



誌・Gトレンチ近景（北東から）



詰・柱穴検出状態（北から）



詰・柱穴検出状態（北から）



北部郭近景（南西から）



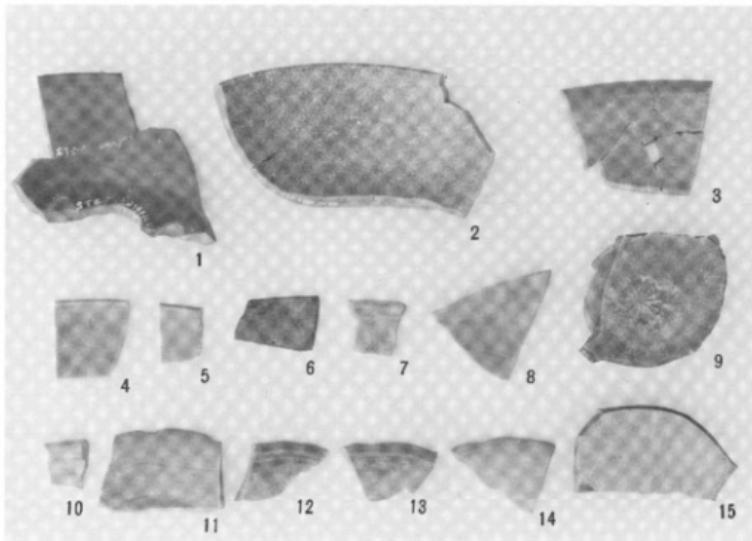
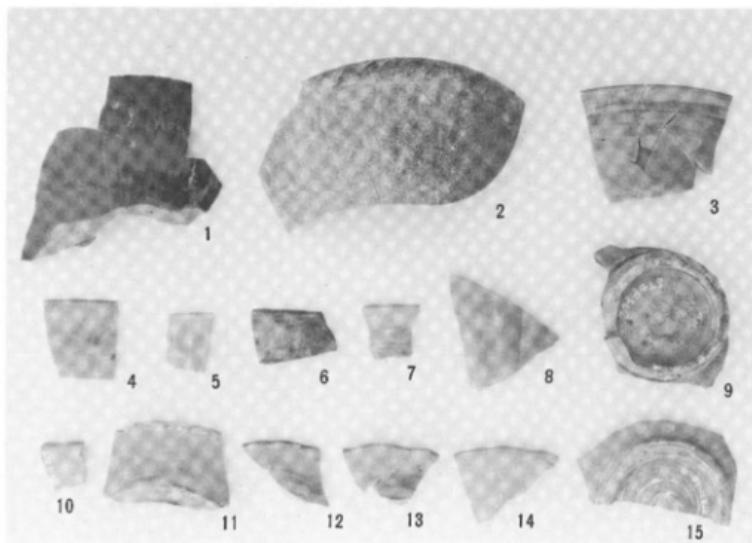
北部郭及び空堀（西から）



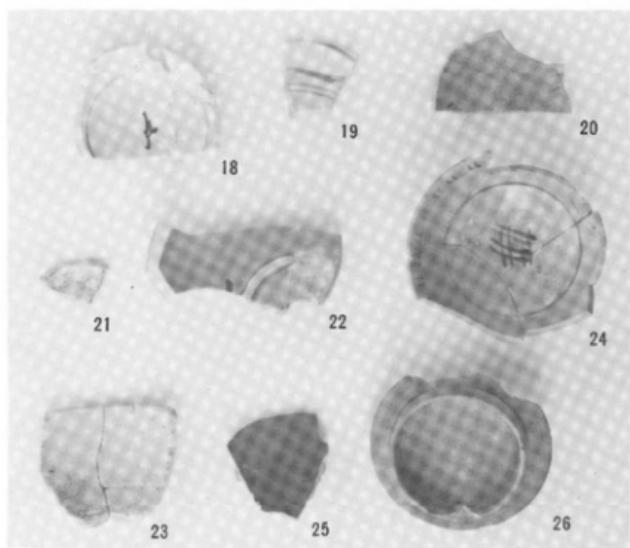
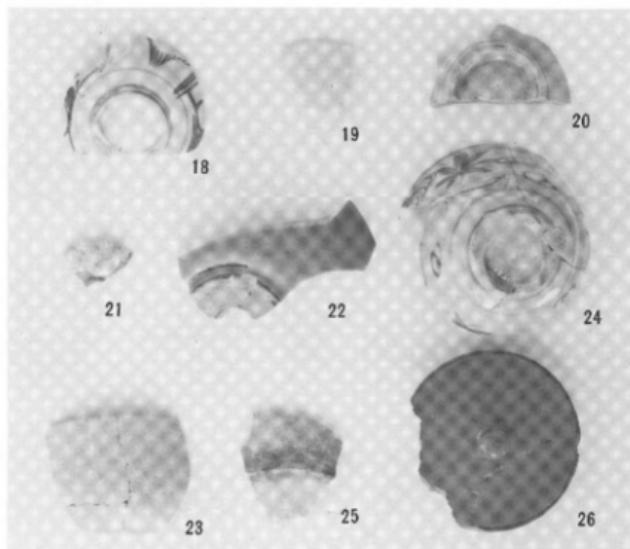
北 部 郊 Hトレンチ近景（南から）



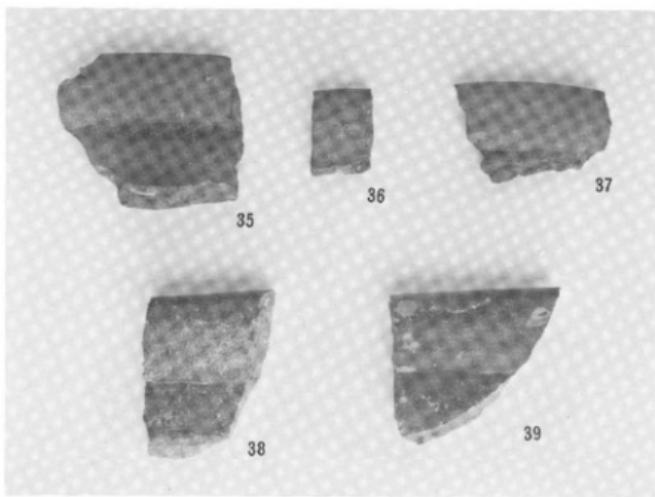
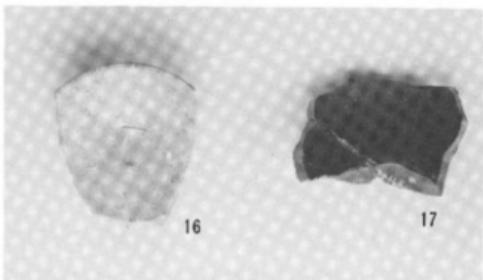
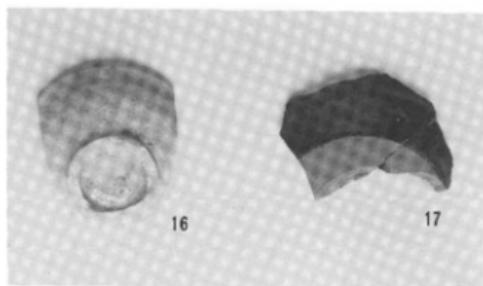
北 部 郊 Hトレンチ近景（北から）



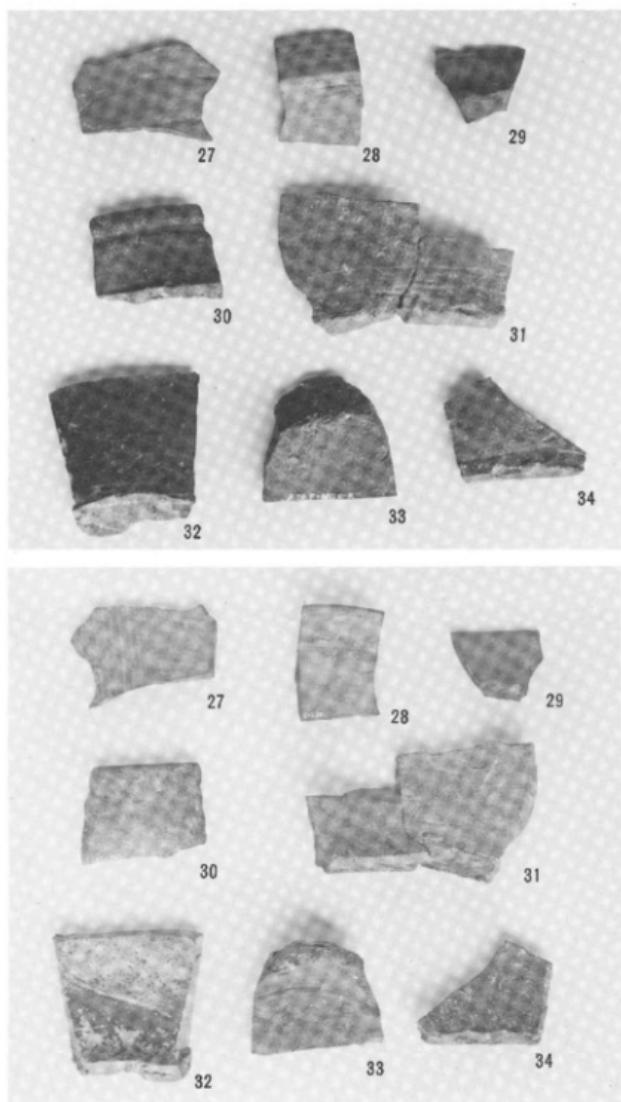
出土 遺 物 (青磁)



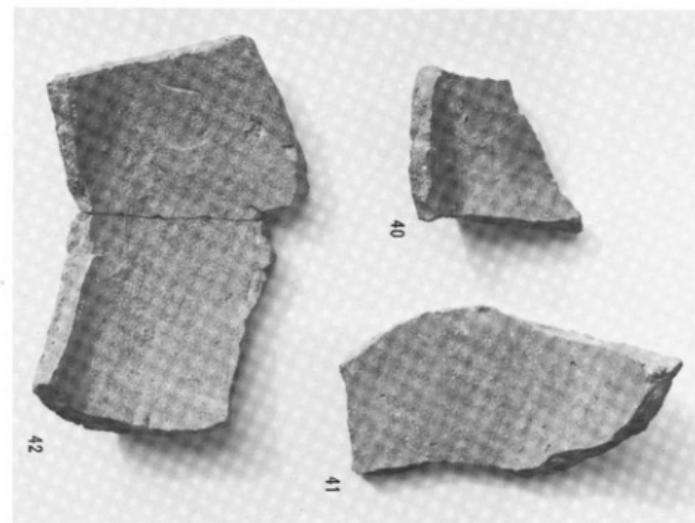
出 土 遺 物 (近世陶磁器)



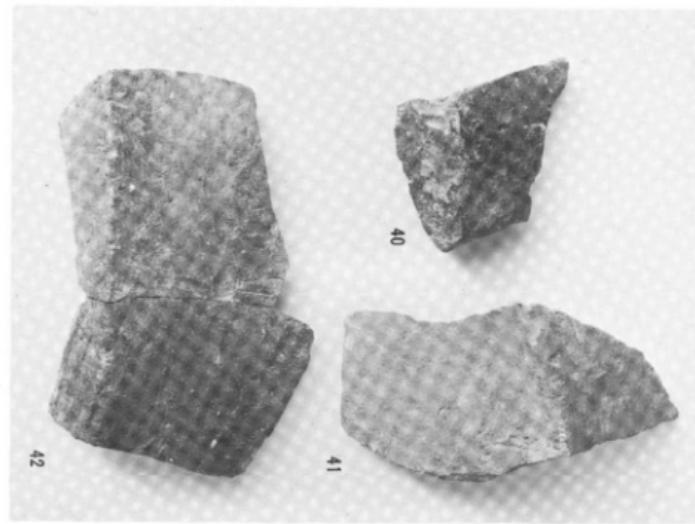
出 土 遺 物 (白磁、瀬戸天目茶碗、備前焼甕)

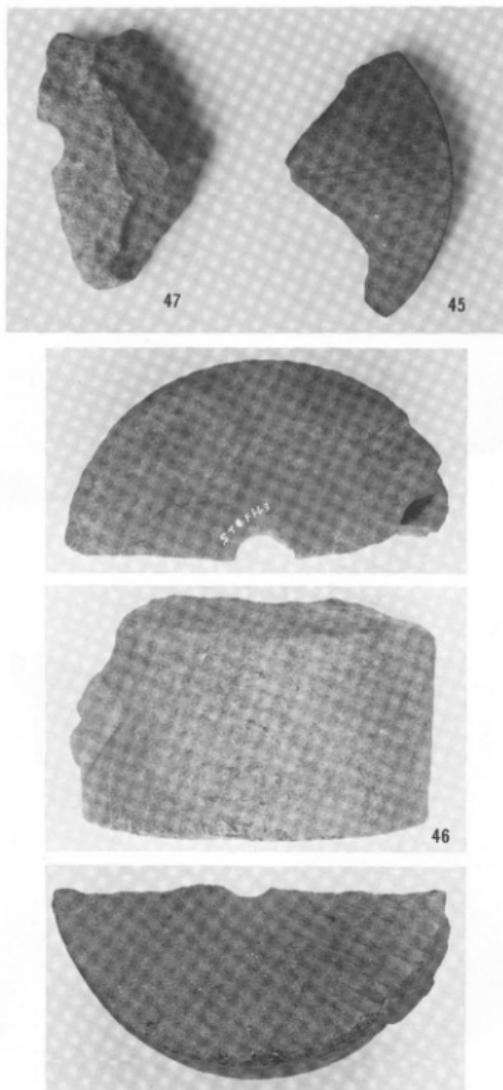


出 土 遺 物 (備前燒擂鉢・壺)

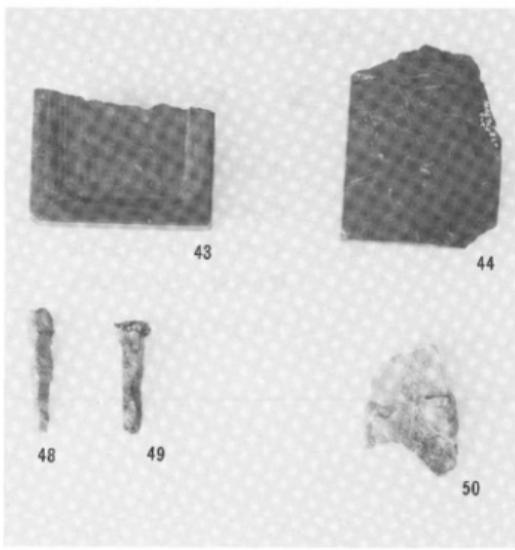
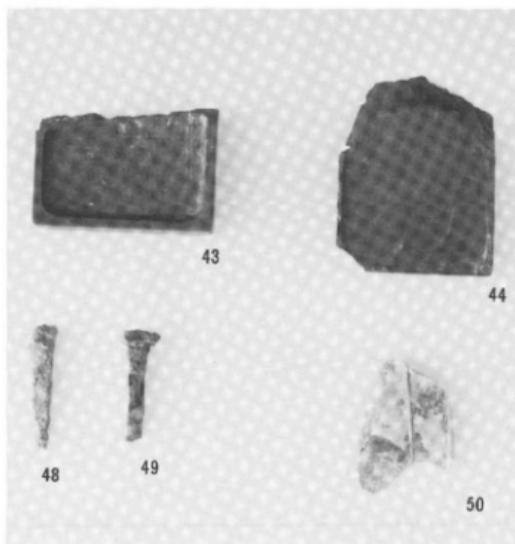


出 土 遺 物 (備前燒器)





出 土 遺 物 (茶臼)



出 土 遺 物 (石硯、鐵釘、銅製品)

高知県中村市

塩塚城跡

編集・発行 中村市右山五月町8-34

中村市教育委員会

印 刷 中村市山手通42

株式会社 文化堂印刷所

1987.3